

戸赤の里 山桜の花豆

栽培

秋田の加工品
てみて
品
(と室井静江さん)

畑の準備・時期、肥料の種類
と量、マルチ、播種時
期、病害、直播・ポット、
追肥、など突っ込んだ質問にこ
たえる(星輝夫さん)



40人台になった村の実態と花豆栽培をとおした村づくりの現状など説明(右端・渡部利男区長さん。中央・秋田せんぼく花豆生産者組合長川井信一さん))

せんぼく花豆
を試食し
新たな商
開発も
できるといいな

生産振興、加工品開
発など県や
町と今後の
方向性など考
え方が
大事(星輝夫さん)

地元の人が買
いたくない
のになってしまう
、地消力が地
域をよみがえ
らせる(松崎さん)



生産者13人、出荷者7人、20aで177kg出荷したせんぼくの組合



訪れた2人の婦人、せんぼくでの栽培の様子を聞かせてくれた

町産業振興班長の佐藤壽一さん、戸赤村のおしき
つかげとなつた1千
万円の元気な町づくり事業の
現状など説明

花豆を通して戸赤に住みたいと思
う人が現れるような運動にと(積田さん)

戸赤のホームページから視察に来ることを決めたという秋田せんぼく花豆生産者組合一行7人が2月13日戸赤を訪れ、栽培・加工品開発など交流していきま

花豆を起爆剤に
「戸赤に住みたい」という人が現れるように

秋田仙北市から花豆視察に来所



この日は戸赤婦人方お楽しみ観音講の外出と重なったため、区長さん宅をお借りしての研修となった。視察団一行が湯野上温泉宿泊に移動する前みんなで記念写真におさまった



畝間・株間など定植間隔、収穫時期、選別など川井組合長夫人らと熱心に意見交換(星光美さん)

町の佐藤産業振興班長、おくや松崎社長、積田さんの協力を得て、区長ら6人が応対しなごやかで充実した交流となりました。



「売る戦略が先にありき」という松崎さんの発想は商品開発で大いに参考になった模様



お土産品としての花豆パイがどのくらい定着しているかわかった様子の視察団



川井組合長の畑(秋田)を光ネットで写真検索

【木地の学習No.40】この年は同時に蛭谷側の回国もあり、氏子狩二分を徹している。この両方を突き合わせてみれば、「老人二分」の正否がわかるはずである。表7(省略)は両社務の氏子狩を受けた戸主の木地師である。これによると「老人二分」の確立は約82%で、かなり信頼のできるものだろう。しかし、いつの時代でもすべて「老人二分」であったとは限らず、不景気の際は減額や免除もされていたようである。寛延二年の氏子狩は会津の木地が不景気であった時であり、針生小屋では「右此所木地不景気付御初穂斗差上申候、氏子狩之儀八御用舎可被下候以上」とあって、氏子狩金は出していない。奥会津田島における木地師 田島木地師発祥と年代 南会津木地師の一大拠点となった田島町針生のセヶ岳山麓には、いつごろ木地師が入り込んだものであろうか。近世前期の後半ごろから昭和初年ごろまで、入れ代り立ち代り木地師のグループが移動をくり返した場所を私は他には知らない。しかし、針生の名主文書は年貢関係を除いて一点も見出し得ないため、木地師の動静がつかめないのは残念である。従って今回参考にした資料は、他地区所在の針生関連文書、氏子駈帳、木地師文書、寺院過去帳、木地師小屋遺跡の石造物等である。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)

知り合いに来てもらってネ。

おいでよ！南会津。
観光物産フェア
in有楽町



下郷町観光協会事務局に出展をお願いした木地製品

首都圏物産展に

木地工房作品も参加

南会津地方振興局が行う首都圏での観光物産展の要請に応じ、木地工房から小椋一さんの作品も参加すること

になりました。ネリバチ、菓子器、ぐいのみなど20点が準備されました。花豆パイはじめ湯野上駅で扱われている地場産品など南会津全域からバラエティーに富んだ物産がPRされます。読者の皆様からもお知り合いの方に、会場にお出かけいただきますよう情報を広げてください。



H26. 2. 17現在

あなたにとこと
今年は大雪でしたか
この辺は豪雪地帯なのであまり驚かなくて
たよな気もするが、今年のは、あなたにとこと
どんな感じでしたか。



H17. 4. 21撮影

“おいでよ！南会津。”観光物産フェアin有楽町

日時 平成26年3月6～7日

午前11時～午後5時

場所 東京交通会館1階イベントスペース
(JR有楽町駅そば)

(ストーリー性のある村づくりのために[No.10]・紅梅前宮 この時、どこからともなく多くの鷲が飛んできて、石川勢をひっかきまわして痛めつけた。「これは、きっと三田八幡ののりうつった鷲に違いない」と以仁王たちは喜び合った。基光らの戦死したところにいた雀は、血に染まったように赤かったので、里人らはこれを石川雀と呼ぶようになった。大内村で、以仁王は、黒丸一人を供にして、麦畑に隠れて渡部らが来るのを待っていると、石川勢が見つけて王を捕まえようとしたが、王は剣を振って五、六人を斬って戦った。黒丸も大いに奮戦したが多勢に無勢で如何んせんとうとう以仁王と黒丸は縄をかけられてしまった。そこへ、渡部らが引き返して十文字に斬り込み、ようやく二人を救い縄を切った。それからこの土地では神罰により王を守れなかった麦を作れば疫病にかかると言われるようになった。その日の夜中に石川の残党が再び襲ってきたので、以仁王は灯りを消して山に登ったが豪雨にあって山に穴を掘り見えないように灯りをともして一夜をしのいだ。そして敵来りなばの用心に岩の上に杉の木などを伐り敷き並べ置いた。果たしても明け方に敵が寄せると、木材をどうっと落としたので敵勢はつぶされて戦死者数知れず。「下郷町史—第5巻民俗編 (発行・下郷町)」より出典 (続く)